

群 教 セ	G10 - 01
	平20.240集

自分のよさを伸ばそうとする児童を 育成する道徳指導の工夫

— 3つの過程をもつ総合単元的な道徳学習

「自分、さい発見」の実践を通して —

長期研修Ⅱ 研修員 井上 早苗

《研究の概要》

本研究は、小学校3年の児童を対象に、自分のよさを実感し、伸ばそうとする意欲を高めるために、道徳の時間を要として総合的な学習の時間と学級活動を関連付けた総合単元的な道徳学習を実施したものである。「『よさ』について考える」「他とのかかわりの中から自分のよさを感じる」「自分のよさを伸ばそうとする」の3つの過程の学習を通して、自分のよさを実感し、継続してよさを発揮しようとする児童の育成を目指した。

キーワード 【道徳 小学校 総合単元的な道徳学習 個性伸長】

I 主題設定の理由

平成19年度に全国学力学習状況調査が行われ、学習意欲や生活の諸側面等の調査も行われた。「自分には、よいところがある。」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」を合わせた回答は、小学6年生で約73%であった。しかし、中学3年生では、その回答が約61%となり、学年が上がるにつれて自分のよさを感じる気持ちは減少していた。自分のよさを見失っていくことは、自分に自信をなくし、心のエネルギーの低下に繋がることであり、不登校や引きこもりの増加と少なからず関係があるといえよう。そのため、小学生のうちから、自分のよさを感じる気持ちを高めていく必要があると考える。

実際、学校現場の子ども達を見ても、自分のよさに対する自覚が少なく、周囲の友達に合わせようとする気持ちが強く、目立つことを嫌う傾向にある。このままでは、自分のよさに気付くことなく、強い子どもの意見やその場の雰囲気にならされてしまうことになり、自分自身を確立することができなくなることもあるだろう。また、学習場面においては、難しい問題が出ると、自分はどうせないんだというあきらめの思いが強い児童が見られた。協力校の児童への事前調査を実施した結果では、「自分のよさがある。」とはっきりと意識している児童は少なかった。

道徳は、平成21年度から新小学校学習指導要領が完全実施される。中学年の内容項目では、「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。」が新しく追加された。自分のよさを伸ばす児童を育てる内

容は、現行の学習指導要領より早い段階から取り入れられ、児童が自分の特徴を知り、自分のよいところを伸ばすことが求められている。

ところが、自分のよさに気付いていても、それがしばらくすると喪失してしまうこともある。そのため、自分のよさを自覚し、伸ばそうとする児童を育てるために、道徳の時間を要とし、体験活動を今まで以上に関連させた学習を行う必要があると思われる。

今までの総合単元的な道徳学習では、道徳の時間と体験活動などを組み合わせるとき、道徳の時間で気付いた価値を生かせるよう意識して指導はしてきたが、十分に効果があげられなかった。

それは、それぞれの活動には違ったねらいがあり、その時間のねらいにとらわれてしまうために道徳教育のねらいが意識されない傾向にあったからと考える。そこで、道徳の時間とそれ以外の学習活動における道徳教育のねらいを明確にし、道徳の時間を要として、児童の心情を掘り起こし、自分のよさを自覚し、そのよさを伸ばそうとする児童を育成するため本主題を設定した。

II 研究のねらい

道徳の時間を要として、総合的な学習の時間と学級活動を関連付け、3つの過程を設定した総合単元的な道徳学習に取り組みせることで、自分のよさを伸ばそうとする意欲が高まることを、実践を通して明らかにしていく。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 「『よさ』について考える」過程において、いろいろな「よさ」を見つめることで、「よさ」について幅広く考えるであろう。
- 2 「他とのかかわりの中から自分のよさを感じる」過程において、周りから自分のよさを伝えてもらうことで、自分のよさに対する自覚を深めるであろう。
- 3 「自分のよさを伸ばそうとする」過程において、自分のよさを実感することで自分のよさに対してさらに自覚を深め、継続しようとする意欲をもつであろう。

Ⅳ 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 基本的な考え方

① 自分のよさとは

児童は、誰でも大なり小なり自分の「よさ」を感じているが、それは、自他の比較や他から認められることによって感じていることが多い。しかし、優劣にとらわれず、児童自身が感じている自分らしさもその児童の「よさ」であり、そのことに気付かせることが必要であると考え。

また、自分のよさを感じ、日常生活の中で発揮することは、自信をもって生活するための基になるものであると考え。そのため、自分のよさを発揮したいという意欲をもたせることも必要であると考え。

② よさを伸ばそうとするとは

よさを伸ばそうとするとは、自分のよさに対する自覚が深まり、そのよさを実感し、継続して、自分のよさを発揮しようとする意欲をもつことと考える。

自分のよさに対する自覚は、一過性のものになってしまうことが少なくない。そこで、心情・行動の両面から、よさに対する自覚を児童に促すことが効果的であると考え。心情面では、道徳の時間で児童の心を掘り起こし、行動面では、自分のよさを実感できるような体験をさせる。この両面を関連付けることが自分のよさを伸ばそうとする意欲を高めることに繋がると考える。

③ 「自分、さい発見」の3つの過程について

よさを伸ばそうとする意欲を高めるために、自分のよさに対する自覚を深め、それが実感へ繋がっていくように3つの過程を設定し、「自分、さい発見」と名付けた。3つの過程とは、以下の通りである(図1)。

ア 「よさ」について考える過程

最初の段階は、児童が「よさ」について幅広く考え、よさを発揮しようとする意欲付けとなるような過程とする。

児童は自分のよさについて何となく感じているが、自覚している児童は少ないと考える。そのため、ここで、日常生活に見られる「よさ」というものを幅広く見つめ直すことが必要であると考え。さらに道徳の時間で、「よさ」を発揮したときの気持ちを考えることで、「よさ」を発揮することの心地よさに気付かせていく。これは、「よさ」を発揮するための原動力になると考える。

イ 他とのかかわりの中から自分のよさを感じる過程

次の段階は、日常生活に見られる「よさ」の中から、自分のよさを周りの人から伝えてもらい、自分のよさに対する自覚を深める過程とする。

アで得た「よさ」に対する幅広い気付きを基に、児童が自分のよさと向き合っていくだけでは、自分のよさに対する気付きも自覚も弱いと考える。

その自覚を補うために、この過程では他者が日常生活の中に見つけた「よさ」を、その人のよさとして具体的に知らせる活動を取り入れる。親切にした人よりされた人の方が記憶に残ることからも、他者の気付きを伝えてもらうことは、自分では気付かないことをいろいろな面から幅広く気付くことになり、見方も広がると考える。

この活動を活発にさせるために、事前に道徳の時間で友達のよさを見つけようとする意欲をもたせることが効果的であると考え。

ウ 自分のよさを伸ばそうとする過程

最後の段階は、自分のよさを実感することで、これからも継続して自分のよさを発揮していこうとする意欲をもたせる過程とする。

イで自覚したよさを、体験を通して実感させるために、自分のよさに着目した役割分担・実践・振り返りの流れのある体験活動の場を意図的に作ることが効果的と考える。自分のよさを発揮することで、自分のよさに対する自覚がさらに深まる。よさを発揮した後の心地よさは、それを継続させ

る意欲になると考える。

そして、道徳の時間で、本単元全体を振り返り、自分のよさにもう一度向かい合わせる。このまとめにより、これからさらに自分のよさを伸ばしていこうとする意欲をもたせていきたい。

これらの3つの過程を経ることで、自分のよさに対する気づきが自覚になり、体験活動の中で実感することで、継続して自分のよさを伸ばそうとする児童を育成できると考える。

④ 3つの過程における意識を継続させるための工夫

児童の意識を継続させるために、特設の「生き生きノート」を使用する。このノートは、道徳の時間やその他の活動で使ったワークシートを中心に、記録したものである。

児童は各々の過程の中で「生き生きノート」を活用し、それまでの自分の考えや思いを読み、振り返ることで、気づきをもう一度思い返したり、次の学習に生かしたりすることができる。と考える。

また、教師はこのノートから、児童の考えや思いを捉え、児童一人一人の実態把握を行う。それをもとに、「生き生きノート」にコメントを書き込んだり、活動の場で声かけをしたりすることで個別支援が充実すると考える。

さらに、この単元終了後は、このノートを保管しておくことで、4年生道徳内容項目「1-（5）個性伸長」を扱うときに、3年生での気づきや学びを想起させるなど、2学年に渡る活用の効果がある。と考える。

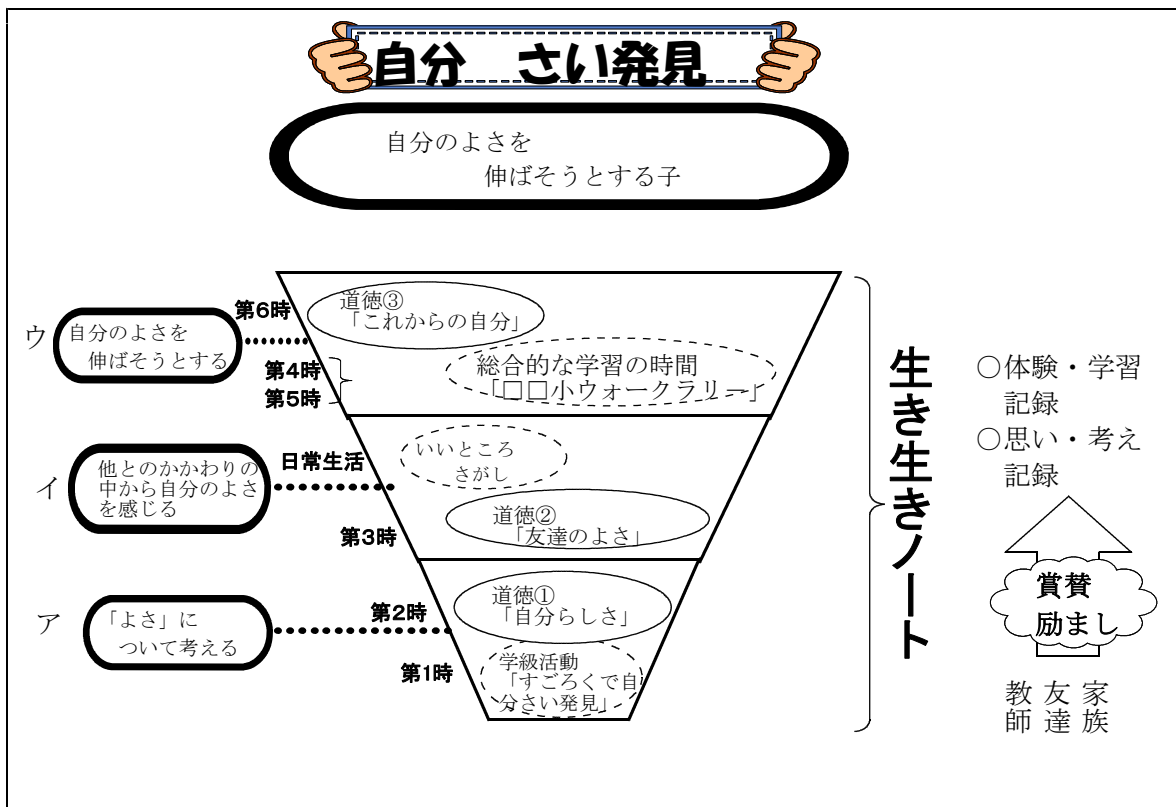


図1 全体構想図

2 研究の方法

(1) 実施計画

対象	小学校 3年生
実践	道徳（3時間）学級活動（1時間）総合的な学習の時間（2時間）
実施期間	10月～11月

(2) 抽出児童

A	自分になかなか自信がもてず、事前のアンケートでは、人とかかわりよりも学習面についての自分のよさを捉えていた。
---	--

B	理解力があるが、大人しく、自分から進んで行動をとることが苦手である。事前のアンケートでは自分のよさを挙げるができなかった。
---	---

(3) 検証計画

検証の場面	検証の観点	検証の方法
「よさ」について考える過程	学級活動や道徳の時間に、すごろくゲームをし、自他のよさをお互いに出し合ったり、「よさ」が発揮できた主人公を資料として「よさ」について考えたりすることは、「よさ」について視点を広げ、「よさ」を発揮する心地よさを感じることに有効であったか。	児童の観察 生き生きノート
他とのかかわりの中から自分のよさを感じる過程	道徳の時間や日常生活において、他の人のよさを見つけようとする気持ちを高め、友達に自分のよさを知らせてもらうことは、自分のよさに対する自覚を深めることに有効であったか。	児童の観察 生き生きノート 中間アンケート
自分のよさを伸ばそうとする過程	学級活動や総合的な学習の時間において、これまでに気付いた自分のよさを生かした体験活動を行い、それをもとに道徳の時間で振り返ったことは、自分のよさを実感し、継続して伸ばしていこうとする意欲をもつことに有効であったか。	児童の観察 生き生きノート 事後アンケート

V 研究の展開

指導計画 「自分、さい発見」

過程	道徳・ 総合的な学習の時間・ 学級活動	主な学習内容 (◎主発問)	支援及び留意点
		本単元にかかわるねらい	
「よさ」について考える。	学級活動 すごろくで、 自分、さい発見	自他のよさをお互いに出し合い、日常生活に見られる「よさ」を幅広く見つめ直す ・班になり、すごろくゲームを楽しみながら、自分や友達のよいところを言う。 ・自分のよさについて見つけたことを「生き生きノート」にまとめ、話し合う。 ・「よさ」について知る。	・3年生の発達段階を考え、「よさ」を見付けることに偏りがなく、様々な場面を振り返らせ、「よさ」を見付ける視点を広げる。 ・前半と後半に分けて、早く終わってしまった班は、間のひと休みにゲーム中の気付きをメモしておくことを話す。 ・「よさ」について説明した用紙を掲示し、「よさ」は一番にできることや上手にできることだけではなく、自分自身が自分のいいなあと思うところにあることを伝える。
	道徳① 「自分らしさ」 新学習指導要領 1 ー(5)個性伸長 資料 『しょうぼうじどうしゃ じふた』 <渡辺茂男作 福音館書店>	・ほめられたことについて話し合う。 ◎子ども達の「ちびっこでも、すごく せいのうがいいんだぞ」という言葉を聞いて、『じふた』はどんなことを考えたでしょう。 ・家に帰り今日の学習内容を家族に話し、話した内容を「生き生きノート」に書くことを知る。	・導入で、「生き生きノート」に書いておいた最近褒められたことを発表させる。 ・「よさ」について、前時を想起させる。 ・小さくても働き者の主人公が周りと比べて自信を失っていく気持ちとよさを生かして活躍したときの気持ちを対比することで、自分のよさを発揮したときの心地よさに気付かせる。 ・「生き生きノート」を持ち帰り、前時の内容も一緒に話し合い、その内容を「生き生きノート」に書いてくることを知らせる。
	道徳② 「友達のよさ」	よさを伸ばすためには、周りの人とかかわりが大切だということに気付き、お互いのよさを見つけ合うとする意欲をもつ ◎「小さいけど力があるわ、あなたのいいところよ。」とよし	・それぞれのよさを意識させるために、学級活動の時間に書いた「生き生きノート」を振り返る。

他 と の か 自 か 分 わ の り よ さ 中 を か 感 ら る 。	2- (3) 友情 資料『ひと言』 (自作資料)	子さんに言われて、たかしさんはどんな気持ちになったでしょう。 ・これから行われる「いいところさがし」について知る。	・自分の考えを「生き生きノート」に書き、自分を見つめるための時間を十分とる。 ・友達のよさを見付けることは、友達のよさを伸ばす助けとなることに気付くよう助言する。
	日常生活 いいところさがし	友達から伝えられたよさを読み、自覚を深める	
自 分 の よ さ を 伸 ば そ う と す る 。	総合的な学習の時間 □□小ウォークラリー をせいこうさせよう。	・2年生時のフェスティバルの取組やふれあい集会の高学年の様子を思い出す。 ・自分達が楽しんで取り組めた理由を考え、話し合う。 ・役割分担を決める。	・それぞれのよさが生かせるように話し合い、役割分担をするように働きかける。 ・担任は、これまでの気づきを把握し、全員の子どもがよさを生かせるよう、その子にふさわしい係を前もって考えておく。
	総合的な学習の時間 □□小ウォークラリー	ウォークラリーにおいて、自分の役割を果たすことで、自分のよさを実感する	
	道徳③ 「これからの自分」 新学習指導要領 1- (5) 個性伸長 資料 『生き生きノート』	・ウォークラリーで面倒をみた2年生から来た手紙をもらった感想を言う。 ◎これまでの学習を「生き生きノート」で振り返って、書かれている様子をまとめてみよう。 ・読み聞かせボランティアのゲストティーチャーの話を聞く。 ・4年生になる自分へのメッセージを書く。	・自分が人の役に立っていることや人に喜んでもらった達成感について触れる。 ・「よさ」のイメージがしやすいように「生き生きノート」から抽出した日常生活に見られる「よさ」を一覧表にし掲示する。 ・「よさ」が発揮できなかった例を考えさせることで、取り組もうとした気持ちやこの次もやってみようという気持ちをもつことが大切であることに気付かせる。 ・ゲストティーチャーの小学生の頃から本を読むことが好きで、それを生かしたボランティアができて楽しいというお話をしてくださる。 ・「生き生きノート」は、4年生になって振り返るように、「心のノート3・4年生」に挟み、次年度に引き継ぐ。

VI 結果と考察

1 結果

(1) 「よさ」について考える過程

① 全体の概要

「『よさ』について考える」過程において、いろいろな「よさ」を見つめることで、「よさ」について幅広く考えるであろう。

第1時の学級活動では、3～4人の生活班に分

かれ、『自分、さい発見すごろく』を行った。こまを進めながら、止まったときや通過するときに友達や自分のいいところについて発表した。楽しそうに活動していたが、自他の「よさ」を言えなくて考え込んでいる児童には、班で助け合うように「〇〇さんが言えないみたい、△△さん教えてあげて。」と声をかけた。児童が友達のよさがかかわりの中で感じた「よさ」として伝え合うことになった。班員同士でいろいろよさを出し合うこ

とで、授業中だけでなく掃除や給食の時間で見られた「よさ」を伝え合い、「よさ」について視点が広げることができた。

終末では、他者との比較で「よさ」を見付けることではないということを理解させるために教師から「よさとは、あなたのいいところであり、自分の中にあるいいなと思えるところです。一番だから、上手にできるからではありません。」ということ伝えた。

第2時の道徳の時間では、自分のよさが発揮できた時はほめられていることが多いと考え、「最近ほめられたこと」について、事前に「生き生きノート」に書かせておき授業の導入で発表させた。「生き生きノート」は次の通りである。

- ・保育園に遊びに行ったとき小さい子と遊んでいて、その子がどろんこになったから、取り替えていたら、先生が来て「ありがとう」と言って、褒めてくれました。
- ・学校で(友達が)こぼした給食をふいたとき。
- ・お母さんに「児童館で宿題をやってきてえらいね。」と言われました。

学校だけでなく、様々な日常生活の中で、自分のよさについて振り返ることができた。その時の気持ちも発表させたことで、自分のよさを発揮すると気持ちがいいということの意識付けが図れた。

資料には、中学年にも親しみやすい絵本で、小型の消防自動車が主人公の「しょうぼうじどうしゃ じふた」を使用した。展開の前半部分で、大きな火事の際に小型のために出動させてもらえなくて、自信を失っている場面と、後半部分で小型の特徴を生かして山火事を消して自信を取り戻すという場面を取り上げた。それらの場面で、主人公がどんな言葉を言い返すでしょうと問いかけ、主人公の気持ちを考えた。自分のよさを発揮したいという気持ちになるよう展開した。

「ぼくだってやくに立つんだ。すごいでしょ。」や「これからもがんばるからね。よろしくね。」という考えが発表され、「よさ」を発揮してうれしい気持ちやこれからも「よさ」を発揮しようという気持ちをもった児童が見られた。

授業終了後、学習について知ってもらうことと「よさ」について話し合ってもらうために「生き生きノート」を家庭に持ち帰らせた。

② 抽出見の様子

抽出見Aは、事前のアンケートでは、自分のい

いところについて「(授業で) みんなが気づかないところを見つけられた。」と書いていたが、第1時では書くことができなかった。Aにとっては自分のよさがはっきりした理解ではなかったので、失ってしまったと考える。そこで、Aがそのことを想起するよう、教師は、「Aさんはいいところを『みんなが気づかないところを見つけられた。』って書いていたよね。」と「生き生きノート」にコメントを書き込んだ。

道徳の時間では、展開の前半で自信を失っている主人公の気持ちを「自分だけちっぽけで火事には行かせてもらえない。」と書いていた。Aは他との比較によってよさを見失うということを感じていた。『よさ』を発揮できるときとできないときの気持ちを「うれしい気持ちと悲しい気持ち」という言葉で表現していた。よさを発揮できることはうれしい気持ちであることに気付いていた。

抽出見Bは、第1時では、班の友達から「うんどうしんけいがよいところ」「やさしいところ」と言われていた。自分も班の男子に「〇〇くんは元気がいいね。」と伝えていた。自分のよさについては、「元気なところ」とすごろく後に「生き生きノート」に書き込んだ。授業後の感想では、「自分のいいところがわかった。友達のよいところを言ったことでわかった。」と書いていた。周りから言われたことよりも、班員に伝えたことで自分を振り返り、自分のよさとして記入し、いろいろな「よさ」の中から、自分のよさに気付くことができた。

道徳の時間では、「ちっちゃくても、やくにたつことがあるって言うところが今日の勉強をして分かりました。」と感想を書いていた。自分のよさを発揮したことの心地よさを感じていた。

(2) 他とのかかわりの中から自分のよさを感じる過程

① 全体の概要

「他とのかかわりの中から自分のよさを感じる」過程において、周りから自分のよさを伝えてもらうことで、自分のよさに対する自覚を深めるであろう。

第3時の道徳の時間は「ひと言」という自作資料を使い、内容項目「2-(3)友情」をねらいとして授業を行った。サッカーの試合で自信をなくした主人公が友達からの励ましの言葉で自信を取り戻すという内容から、周りの人とのかかわりから自分のよさを気付くことがあることを気付か

せる展開とした。授業後の感想には、「人の言葉で動きや気持ちが変わるんだな。」や「いいところを言ってあげたりすると人が元気になってくれるんだな。」と書かれており、自信を取り戻した主人公が、友達のひと言で新たな自分のよさに気付いたということを感じることができた。

その後の2週間、「いいところさがし」を行った。友達のよさを見つけたら、付箋紙を「生き生きノート」の後ろに貼った袋に書きためておいた。水曜日と金曜日の帰りの会に交換会を開いた。一人につき3枚～7枚の付箋紙を受け取ることができた。教師は事前に内容や枚数を把握しておき、もらえない児童には、周りの児童に声をかけその児童を観察してもらったり、教師がその児童の行動を観察したりして、付箋紙がもらえるよう配慮した。

付箋紙には、次のように具体的な場面が書かれていた(図2)。

- ・保健室に連れて行ってくれた。
- ・掃除の時間に手伝ってくれた。
- ・体育の時間に長距離を走っていたとき『頑張れ』と言ってくれた。

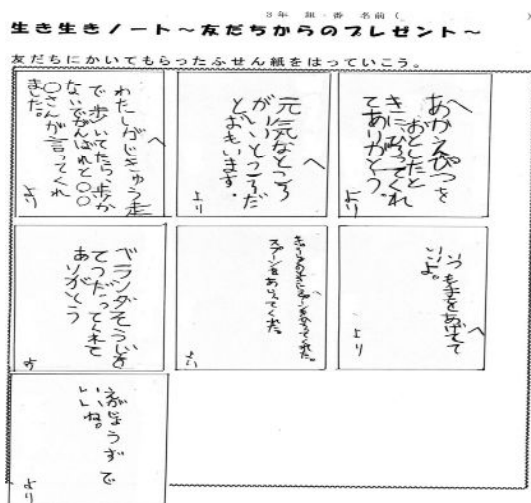


図2 「生き生きノート」

担任の観察では、この活動により、「よさ」を発揮しようとする児童が増えたとのことであり、学級の雰囲気も変えることになった。「よさ」を発揮しようとする児童の増加という結果からも児童の「よさ」への自覚が深まったことが分かる。

② 抽出児の様子

抽出児Aは、道徳の時間の振り返りでは、「やればできることがわかった。」と書き、自信をな

くした主人公に対する思いを書いていた。人のかかわりが、気持ちに影響を与えることへの気付きは弱かったが、自分のよさに対する視点では行動することの大切さを感じていた。

「いいところさがし」では、近くの席の子から、「1時間目にえんぴつをかしてくれてありがとう。すごく、たすかったよ。」という付箋紙を1枚もらったが、自分からは友達になかなか書かなかった。2回目の付箋紙交換の前に教師が声をかけると、「△△くん、きょうしつのを直していたね。」と1枚書いた。他の児童と比べると付箋紙のやり取りは少なかった。

抽出児Bは、道徳の時間でよさを発揮した主人公に対して、「よしさんが言ってくれたから、たかしさんは(新たな自分のよさに)気がついた。」と書いていた。主人公が友達のひと言によって次のやる気をもてたことに気付き、振り返りでも、「失敗しても、頑張ればできるということがわかった。よしさんみたいな人になりたい。」と書いていた。友達のよさを進んで探し、みんなに伝えようとする気持ちを強くもった。

そのため、「いいところさがし」では、友達に対して、初日に3枚書き、交換会の次の日には、8枚書いていた。友達が優しく接してくれたことに対するものが多くパターン化していたものの、よさを探して伝えるという行動は意欲的であった。そして、友達から書いてもらったことを自分のよさとして捉えていた。給食の時間や帰りの会に見られた友達の「よさ」を具体的な姿として挙げることで、自分自身も幅広く見つめ直していた。

(3) 自分のよさを伸ばそうとする過程

① 全体の概要

「自分のよさを伸ばそうとする」過程において、自分のよさを実感することで自分のよさに対して自覚を深め、継続しようとする意欲をもつであろう。

第4時の総合的な学習の時間においては、「□□小ウォークラリー(以下ウォークラリーとする)を成功させよう」というねらいで4人一組の班に分かれ、役割分担と仕事内容について話し合った。単なる係決めでなく、「生き生きノート」を互いに参考にしながら、各班で各自のよさを生かせる具体的な仕事内容までも考えさせた。

「生き生きノート」にあげられたよさには、今回の係決めの参考にならない内容のものもあり、決まらないこともあるのではと考え、新たな視点

を与えるために、教師の日常生活の見取りから児童一人一人によさを前もって考えておき、悩んでいる児童には適宜助言した（表1）。

表1 ウォークラリーで期待される児童のよさ

氏名	ウォークラリーの班	伸ばしてほしいよさ
〇〇〇〇	こすりだし	話すこと
△△△△	オナモミつり	大きな声が出せる。
◇◇◇◇	昆虫さがし	字を丁寧に書く
□□□□	カモフラージュ	友達思い。

第5時のウォークラリーでは、どの児童も楽しそうに取り組んでおり、「人に優しくできること」を生かして2年生の面倒を見るなど、よさを生かして活動していた。教師は各班を回り、より自信をもってよさが発揮できるよう声をかけた。例えば、司会係に対しては、大きな声で行っている様子を見かけると「大きな声が出ていたよ。」という励ましを行った。

ウォークラリー終了後、振り返りを行った。ここでは、「自分のよさが発揮できた人」という問いかけに対して、80%の児童が挙手した。

第6時の道徳の時間においては、前時に行われたウォークラリーの体験を資料として、これからも自分でよさを意識していこうとする気持ちがもてるように展開した。

まず、2年生から届いた手紙に触れ、書かれている内容を読み、感想を発表させた。その後、ウォークラリーの成功体験と比較させるために、よさが発揮できなかった架空の例をもとにして、よさを伸ばそうという気持ちを持ち続けることが大切であることに気付かせた。さらに、自分のよさを生かしながら生活している学校支援ボランティアの方に来てもらい、「小さいころから本を読むことが好きで、今の読み聞かせボランティアがとても楽しみだ。」という話を聞かせてもらった。

終末で、これまでの学習を振り返り、これからの自分を考えさせるために、4年生になる頃の自分に対してのメッセージを「生き生きノート」に書き込んだ。

児童の70%は、自分のよさに視点をおき、自分

のよさを伸ばそうとする意欲をもったメッセージを書いていた。主なものは次の通りである。

・わたしには、いいところがあります。4年生になってもいいところをなくさないようにしたいと思います。

・自分のよさをはっきしていますか。もしできていなければ、これからがんばりましょう。

・みんなが「わたしのいいところはやさしいところだよ。」って言ってます。始めは、本当にやさしいところかなと思いました。付箋紙に書いてもらったので、そういうところだなと思っています。

自分のよさに視点が向かない児童の中には、学習に対する抱負を書く子もいたが、ウォークラリーに関することが書かれ、ウォークラリーの成功体験は、自分のよさを実感することになった。

② 抽出児の様子

抽出児Aは、ここまでの「生き生きノート」に自分のよさとして書かれていることが少なく、「いいところさがし」が終わった後にとった中間アンケートでは、自分のよさに自信をもてないと回答した。第4時の班に分かれた役割分担では、Aも班の子も「(よさを生かした係が)見つからない。」と悩んだ。

教師は表1の「ウォークラリーで期待される児童のよさ」を参考にして、「字や絵が丁寧だよ。説明文や絵をかいてみる？」と助言した。「絵のほうがいいな。」と言い、絵を描く役割に決まった。終末には「生き生きノート」に、「絵を頑張ります。」と目当てを書き込んだ。

ウォークラリー終了後の振り返りでは、自分のよさを発揮できたと挙手した。道徳の時間の4年生への自分へのメッセージでは、「4年生になってもいろいろなことをがんばっていますか。3年生の授業を思い出して、自分のいいところを見つけてください。」と書いていた。これからも自分のよさを伸ばそうとする意欲が感じられることを書いていた。

抽出児Bは、ここまでの学習で自分のよさに気付くことはできたものの、第4時の役割分担では大人しい性格のためか自分からなかなか言い出すことができなかった。近くの児童が『やさしい』が生き生きノートにあるね。」と付箋紙に触れ、教師が「Bさん、親切だよ。親切係やってみる。」と聞くと、小さくうなずいた。Bにとって、係を決めるために、周りの子の助けは大きな力になっ

たようである。目当てを書かせると、「分からない人に親切にします。」と係に対する意欲を表現していた。

ウォークラリー終了後の振り返りでは、自分のよさを発揮できたと挙手した。道徳の時間の4年生への自分へのメッセージでは、「4年生になって、ウォークラリーみたいなことをやるときも4年生らしくやります。」という内容を書いていた。「4年生らしくってどういうこと」と聞くと、「親切にしてあげるといこと」と答えた。次に同じような場面があったときも、それを発揮しようとする気持ちをもつことができた。

2 考察

(1) 「よさ」について考える過程

「よさ」をゲーム感覚で探す活動を取り入れたことで、「楽しい」「おもしろい」という気持ちになり、授業内で「よさ」をみつけてみようという意欲をもたせることができた。「よさ」について伝え合った内容を見ると、他と比較して優れているという最も目につくことだけでなく、その子自身の特徴的なところを探し、伝えていた。また、見えるよさだけでなく内面の見えないよさについて伝え合っていた。さらに、抽出児Bのように、友達に伝えた内容を自分に置きかえ、自分のよさとして気付く児童がいた。以上のことから、「よさ」について視点を広げることができたと考える。

この後の道徳の時間では、「よさ」を発揮したときの気持ちを考えることで、「よさ」を発揮する心地よさに気付くことができたと考える。

それは、児童が終末で以下のように「生き生きノート」に書き込んだ内容からも見取ることができる。

- | |
|--|
| (a) 嫌なことがあればいいこともある。
(b) 小さくても役に立つことが分かりました。
(c) じぶたが最後に活躍できてよかった、自分も一回くらいは活躍したいな。 |
|--|

(a) のように落ち込んでいるだけではなく、また発揮してみようという気持ち、(b) のように「よさ」を発揮することは人の役に立つんだという気持ち、(c) のように主人公に自分を重ねている気持ちが書かれていた。90%の児童が「よさ」を発揮すると気持ちがいいものであるということを感じることができたと考える。

この過程では、多様な「よさ」を思い浮かべ、「よさ」についての意識付けをし、発揮した心地

よさに気付かせることで「よさ」を発揮しようとすることを考え始めることになったと考える。

(2) 他とのかかわりの中から自分のよさを感じる過程

児童は、道徳の時間に「友達のよさに気付かせてくれる人がいたらいいな。」や「友達のよさに気付かせられる人になりたい。」という感想を書いていた。道徳の時間で友達のよさを見つけようという意欲を高めたことで、続く「いいところさがし」の活動において、学校生活の様々な場面から友達のよさを探し合うことに繋がった。しかし、抽出児Aのように道徳の時間での気持ちの高まりが弱いと、その後の活動は消極的な傾向になり、自分のよさも感じ取りにくくなることが分かった。道徳の時間で気持ちを高めることは、次の活動を意欲的な活動をするために必要なことであったと考える。

また、「いいところさがし」を行ったことで、自分のよさに対する自覚を深めることができた。その終了後の中間アンケートの結果(図3)から「自分にはよいところがある。」という問いに対して「当てはまる」と回答した児童が最も多かったことから伺える。

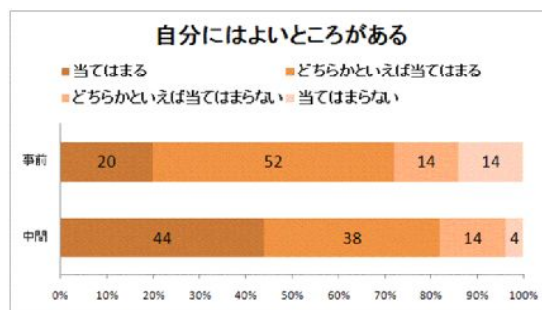


図3 児童アンケート①

周りから伝えてもらうことが多いほど、児童は、それを自分のよさとして自覚する気持ちをもっていった。友達から自分のよさを伝えてもらうことで、児童自身が自分のよさを発揮した様々な具体的な姿を感じることができ、児童が自分のよさに対する自覚を深めたと考える。

しかし、「いいところさがし」など授業時間以外の活動は、教師が児童の活動状況を把握しにくい。児童の活動状況を把握し、「よさ」を見つけようとする意識が低い児童に対しては、具体的な声かけを行い、支援することが必要であった。

(3) 自分のよさを伸ばそうとする過程

これまでに気付いた自分のよさを生かせる体験活動の場を、児童の準備の段階から設け実践した。その活動を道德の時間で振り返ったことで、体験活動で得られた、よさを発揮した後の心地よさは、これからも自分のよさを発揮していこうという意欲に繋がったと考える。

事後アンケート（図4）からも分かるように、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が増え、「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」が減少している。

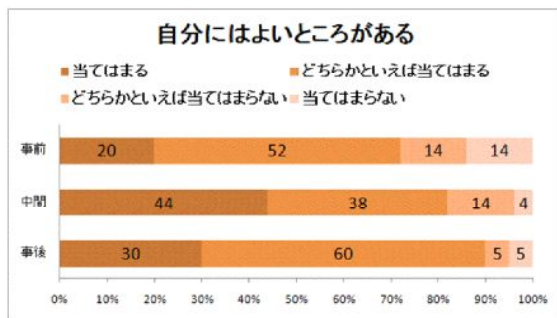


図4 児童アンケート②

また、同じアンケートの中で、「単元全体を振り返ったときに自分のよさについて最も考えた時間はどこか。」という問いかけに対し、80%の児童が体験活動を含むこの過程の時間を挙げていた。よさについて着目した役割分担・実践・振り返りの一連の流れは、自分のよさについて実感させることに有効な流れであったと考える。言葉よりも体験活動からの方がより強く児童が実感したと言える。

最後の道德の時間に児童が書いたメッセージから、今後も自分のよさを発揮しようとする意欲が見取れる。それは、この道德の時間に成功体験を振り返ったことを基に、よさを発揮することの大切さに気付かせたことが効果的であったためと考える。

人とかかわりが苦手なため、この過程で友達とうまく付箋紙を交換できない児童の場合でも、自分自身の成功体験から満足感を得て、自分のよさに対する自覚を深めることができたと言える。成功体験などを積み重ねていくことは、自分のよさを確かに自覚することになり、よさを伸ばそうとする意欲になっていったと考える。

(4) 「生き生きノート」について

本単元を通して、「生き生きノート」を活用し

たことにより、児童は、自分のよさを伸ばそうとする意識を継続して持ち続けることができた。

道德の時間に自分のよさを発揮したときの気持ちを考えるときに、「生き生きノート」を読み返すことで、その時の気持ちを想起し、自分を見つめ直すことができた。また、自分のよさとして様々な具体的な姿を「生き生きノート」を読み返すことで自分のよさに対する自覚が深まった。

教師も、児童が「生き生きノート」に事前に書き込んだことを把握することで、道德の時間に意図的指名を行うことができた。また、教師が活動を把握しにくい日常生活も、「生き生きノート」に目を通すことで、児童の活動状況が分かり、個別支援に生かすことができた。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

○児童は、3つの過程を経ることで自分のよさを実感し、継続して発揮しようとする意欲が見られるようになり、自分のよさを伸ばそうするために、効果的であったと考える。

○「生き生きノート」を活用することによって、6時間の児童の意識を繋ぐことができた。また、教師が児童のよさに対する思いを継続して見取ることができ、個別支援に生かすことができた。

2 課題

○自分のよさを最後まで意識させることができなかった児童が見られたので、個別支援が効果的に行えるような工夫をしていきたい。

○4年生では、長所だけではなく短所にも目を向け、自分の特徴全体を捉えさせる道德学習を行うための構想を考えていきたい。

<参考文献>

- ・押谷 由夫 著 『子どもとつくる総合単元的な道德学習』 東洋館出版(2001)
- ・落合 幸子 編 『小学3年生の心理』 大日本図書(2000)
- ・近藤 卓 著 『生きる力を支える自尊感情』 金子書房(2007)
- ・岩田 純一 著 『自尊感情はどう育つか』 金子書房(2007)